

AJ

316

vol.

AQUA JOURNAL
Nature Aquarium
information magazine

FEBRUARY.2022
100YEN



[新年号]

NATURE AQUARIUM
CHRONICLE

ネイチャーアクアリウム クロニクル

理想の水槽を目指して

1992年4月、ネイチャーアクアリウムの創始者天野 尚によって、
株式会社アクアデザインアマノは設立されました。
以来、それまでなかった水草育成専用製品を開発し続け、
現在に至るまでADAらしい製品群を生み出してきました。
さらに時代ごとの技術を取り入れて自己革新を続けながら、
水槽の中に自然を再現するネイチャーアクアリウムの世界を、
本誌を中心に30年の歳月を経てもなお継続して発信を行っています。
本特集では年代を追って水景を掲載し、これまでの歩みを紹介します。■

KEEP ON.

1992年以前からネイチャーアクアリウムの原形となる
美しい水景が制作されていた。

DATA — 水槽 W180×D100×H80(cm) / 撮影日 1985年10月



CO₂添加と専用照明による高光量によって、リシア
が活発に光合成を行う水景づくりを可能にした。

DATA — 水槽 W90×D45×H45(cm) / 撮影日 1994年11月

NATURE AQUARIUM CHRONICLE
1992-1995.

到来 ADA現象の

水草の育成方法に大きな影響をもたらしたのが二酸化炭素の添加であり、CO₂小型カートリッジボンベを用いた「CO₂システム74-YA/Ver.2」の開発は、現在のADAのCO₂添加システムの礎となった。さらに水槽への添加を行う専用ガラス器具として「バレングラス」を発売。細かな気泡で美しく水中に添加する自然添加は、強制添加とは違いCO₂が過剰になりにくいメリットもあった。また、業界初となる水草育成専用

の蛍光灯「NAランプ」の開発に続き、照明器具「グリーングロウ/604」を世に送り出した。これらの登場により、それまで実現が難しかった水草の高光量育成が可能になつたことで、リシアなどの陽生水草や多種多様な水草が健康に育成できるようになった。専用設計された製品群を用いて制作されたネイチャーアクアリウムは美しく、発表された数々の水景はADA現象として大きな反響を呼んだ。

NATURE AQUARIUM CHRONICLE
1996-1999.



アクアソイルには水草に必要な養分とpHを弱酸性に保つ効果があり、新しい底床の基礎となった。この水景では生体の産地イメージからアフリカーナを使用。

DATA — 水槽 W120×D45×H45(cm) / 撮影日 1996年4月

新たな底床時代 水草が本来の姿をみせる

このころ、天野 尚(以降、天野)の視点は世界三大熱帯雨林へと向けられる。世界各地で撮られた写真には、誰も見たことない熱帯原生林の姿があった。そんな撮影活動の影響もあり、世界三大熱帯雨林の土壤をイメージした「アクアソイル」を発売。天然土壤を特殊焼成したこの底床土シリーズには、「アマゾニア」、「マレーや」、「アフリカーナ」の3種類がラインナップされた。この新たな底床土の登場により、それまで主流であった海産砂を使用した底床づくりは少なくなっていた。また、CO₂の適正添加量を確認しやすい「ドロップチェッカー」や、水草の白化改善に効果的な添加液「ECA」の製品化により、水草育成をより高次元で実現することが可能になった。そして、悲願だった「スーパージェットフィルターES-600」が誕生。それは高い揚程力のポンプと大容量で堅牢なステンレス製キャニスターが特長であり、ネイチャーアクアリウムを長期的に楽しむ上でなくてはならない神器となつた。



ECAは白化した水草に効果を発揮する他、赤系の水草においてはより鮮やかな色彩を引き出した。

DATA — 水槽 W60×D30×H36(cm) / 撮影日 1997年



クリプトコリネと相性が良いアクアソイル-マレーやをあえて露出させることで自生地の雰囲気を楽しむ水景に。

DATA — 水槽 W90×D45×H45(cm) / 撮影日 1997年6月



ネイチャーアクアリウムとビオトープの庭が
連なるこの空間は天野の理想でもあった。

DATA — 水槽 W400×D150×H150(cm) / 撮影日 2004年

未来を見据えた ひとつの原点

2001年、天野は自邸にW400×D150×H150(cm)の超大型ネイチャーアクアリウムを完成させた。その管理システムは、太陽光の入射に応じたCO₂添加や換水などをオートメーション化したものだった。メインの照明には水草育成用に独自開発されたメタルハライドランプ「NAMH-150W」を採用。そして、その光を取り入れた水草育成用照明器具「ソーラーI」が誕生する。つり下げ式照明のシンプルなデザインと水面からも熱帯魚や水草が

観賞できる開放的なスタイルは、アクアリウムをインテリアとして室内に溶け込ませた。この天野自邸の超大型ネイチャーアクアリウムは、その後に続く水族館への巨大水槽の設置や管理の基礎データ収集に役立つとともに、2001年から開催されている「世界水草レイアウトコンテスト」の関連イベントであるネイチャーアクアリウム・パーティーなどで参加者限定で公開されてきた。アクアリストなら一度は見てみたい憧れの空間と言える。

NATURE AQUARIUM CHRONICLE
2000-2003.



荒々しい印象のある龍王石も寝かせて使うことで大らかで広がりのある印象となる。表面の凹凸や白い筋の向きに共通性をもたせ、土の中で石がつながっているような自然な状態を表現している。

DATA — 水槽 W180×D60×H60(cm) / 撮影日 2006年9月

表現が広がる石組の手法

水槽の中に石や流木を入れて構図を組むというレイアウト手法は、ネイチャーアクアリウムによって確立されたと言っても過言ではないだろう。中でも石組レイアウトのシンプルな表現は特徴的であり、極めて斬新だった。初期の石組レイアウトは、角の丸い仙見川石や八海石などの川石でつくられることが多かつたが、その後発売された「龍王石」や「万天石」などの形状と質感の異なる石が加わることで表現の幅はさらに広がった。その水景からイメージされる景観は、川だけでなく、海、山、草原にまで及んだ。配石においても基本である三尊石組だけでなく、岩礁や山岳地帯のように石を連続的に配した技法も確立され、植栽する水草や泳がせる魚のバリエーションと組み合わせて多種多様な表現が生まれることになった。



3石2群で構成された石組レイアウト。底床は化粧砂とアクアソイルを敷き分ける手法を用いており、左右のスペースの構成は黄金比(1.618:1)でバランスをとっている。

DATA — 水槽 W90×D45×H45(cm) / 撮影日 2005年7月

NATURE AQUARIUM CHRONICLE

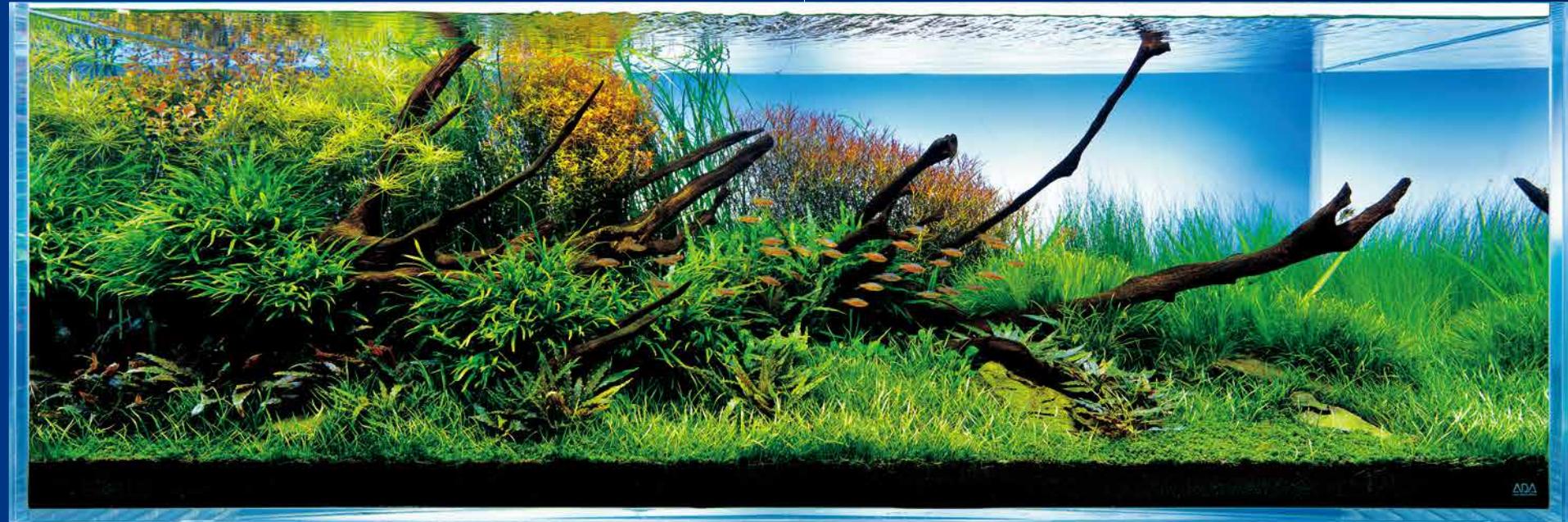
2004-2006-



複数種の水草を植栽することで植物の階層的な構造を再現し、配石と盛土を工夫することで小さな水槽でも遠近感を演出することができる。

DATA — 水槽 W60×D30×H36(cm) / 撮影日 2005年5月

NATURE AQUARIUM CHRONICLE
2007-2009.



より使いやすく進化したツールで、高い密度での植栽と適切なトリミングが可能となった。

DATA — 水槽 W180×D60×H60(cm) / 撮影日 2009年10月

繊細な管理と

ネイチャーアクアリウムの普及や素材の充実、技術向上に伴い、だいぶバリエーション豊かな水景がつくられるようになった。複雑なレイアウトでは繊細な植栽、管理が必要となり、レイアウト・メンテナンス用品にもそれに対応する多様な機能性が求められた。そうした背景もあり、この年代には用途に合わせたユニークなツールが誕生した。それらの中でもひときわ特徴的な「プロシザース・ウェーブ」も、日々の水草の維持管理の中で生まれたアイデアや改善点が形になったものであり、使用する際の角度によって細かな部分のトリミングから前景草(下草)などの広範囲なトリミングまでをスムーズに行うことができる。さまざまな用途によってツールを使い分けることで、ネイチャーアクアリウムはより完成度の高い仕上がりになつていった。



多彩な背景の有茎草には伸び草が使用されている。植栽密度があがるだけでなく、大型水槽レイアウトの作業時間短縮にもつながっている。

DATA — 水槽 W240×D60×H60(cm) / 撮影日 2009年10月

NATURE AQUARIUM CHRONICLE
2010-2012.



DATA — 水槽 W414×D164×H170(cm) / 撮影日 2014年11月

ADAの専門スタッフによる一年を通じた管理計画により、
水景が美しく維持管理されている。

**NAシステムが
導き出す超大型
ネイチャーアクアリウム**

東京スカイツリーに隣接するすみだ水族館に、容積と水槽サイズが当時(2012年)世界一となる幅4mと7mの超大型ネイチャーアクアリウムが制作された。それから10年と長期的に展示されているこの水槽の基本システムは、天野自邸の4m水槽のシステムをベースにしたもので、大容量のろ過装置や添加効率を優先した強制添加方式のCO₂システムが組み込まれている。また、照明器具も同じ光源となるメタルハライドランプを装備した当時のフラッグシップモデル「グランドソーラーI」が設置された。

こうしてADAがこれまでに開発し、改良を続けてきたNAシステムを応用することで、超大型水槽も長期に渡り安定した状態を保つことが可能となった。また、水草の管理においては専門の管理スタッフによって水深のある超大型水槽用にメンテナンスツールが工夫、改良され、小型水槽での作業と大差ない、繊細かつ正確なメンテナンスが今日に至るまで行なわれてきている。こうした水族館での水槽展示においても、ADAが時間をかけて培ってきたノウハウが大いに生かされている。



DATA — 水槽 W710×D110×H120(cm) / 撮影日 2014年11月



NATURE AQUARIUM CHRONICLE
2013-2015.

全長40m水槽とは思えない緻密な表現が実現、維持されている。

DATA — 水槽 W4000×D250×H150(cm) / 撮影日 2015年7月

集大成と夢情熱の

2015年、天野の水景クリエイター人生の集大成となる全長40mの巨大ネイチャーアクアリウム「Florestas Submersas(水中の森)」を特別展示としてボルトガルのリスボン海洋水族館に制作。現地の水族館スタッフやヨーロッパの水草愛好家も参加し、約1週間に渡って制作されたこの作品は、日本国内の水草愛好家から提供された水草も多く植栽され、まさに夢と情熱の詰まった作品となつた。このとてつもない規模の水景は、ADAスタッフが現地に駐在してメンテナンスを行なってきた。制作当初はヨーロッパの水質の違いや、排水処理方法の基準による換水量の制限、照明器具の適切な照度設定に

悩まされることになったが、天野自邸4m水槽やすみだ水族館の大型水槽のメンテナンスでの経験を生かして駐在スタッフは何か解決策を見出した。また、ADAとしては初めての水槽への潜水による細かな管理作業も取り入れ、天野が意図したレイアウト表現を実現。こうして世界一大きなネイチャーアクアリウムは2015年4月に公開され、同年、リスボン海洋水族館は世界最大の旅行情報サイト・トリップアドバイザーの人気ランキングで水族館部門第1位となつた。世界中に感動を与え大好評となつたこの作品は、世界のアクアリストの憧れとして、そして環境モデルとして今も展示が続けられている。

ADAの新たな光

2016年～2018年のこの時期は、ADAにとって新たな光が差し込んだ年代と言える。2016年、水草の育成と観賞に最適な波長分布を実現した新たなフラッグシップとなる照明器具「ソーラーRGB」発売。水草育成用照明器具としては世界に先駆けてRGB LEDを採用し、その最適化された波長によって水草をより鮮やかに照らし、水景の印象をワンランクアップさせた。翌年、水槽の背面からLEDを発光させてバックライト効果を持つ「ライトスクリーン」を発売。この2つの照明器具は、水景を美しく演出するために効果を発揮し、今ではADAが行うネイチャーアクアリウム展示イベントでは欠かせないアイテムとなっている。また、2017年には、「ネオグラス」シリーズを皮切りに、水と緑の自由な楽しみ方を提案する新ブランド「DOOA」が誕生。ブランド・ポジショニングは「ADA NATURE AQUARIUM」と横並びであり、二大ブランド体制となる。そして、アノイズムは5人の水景クリエイターに受け継がれ、ブランニューADAとして新たなるスタートを切った。



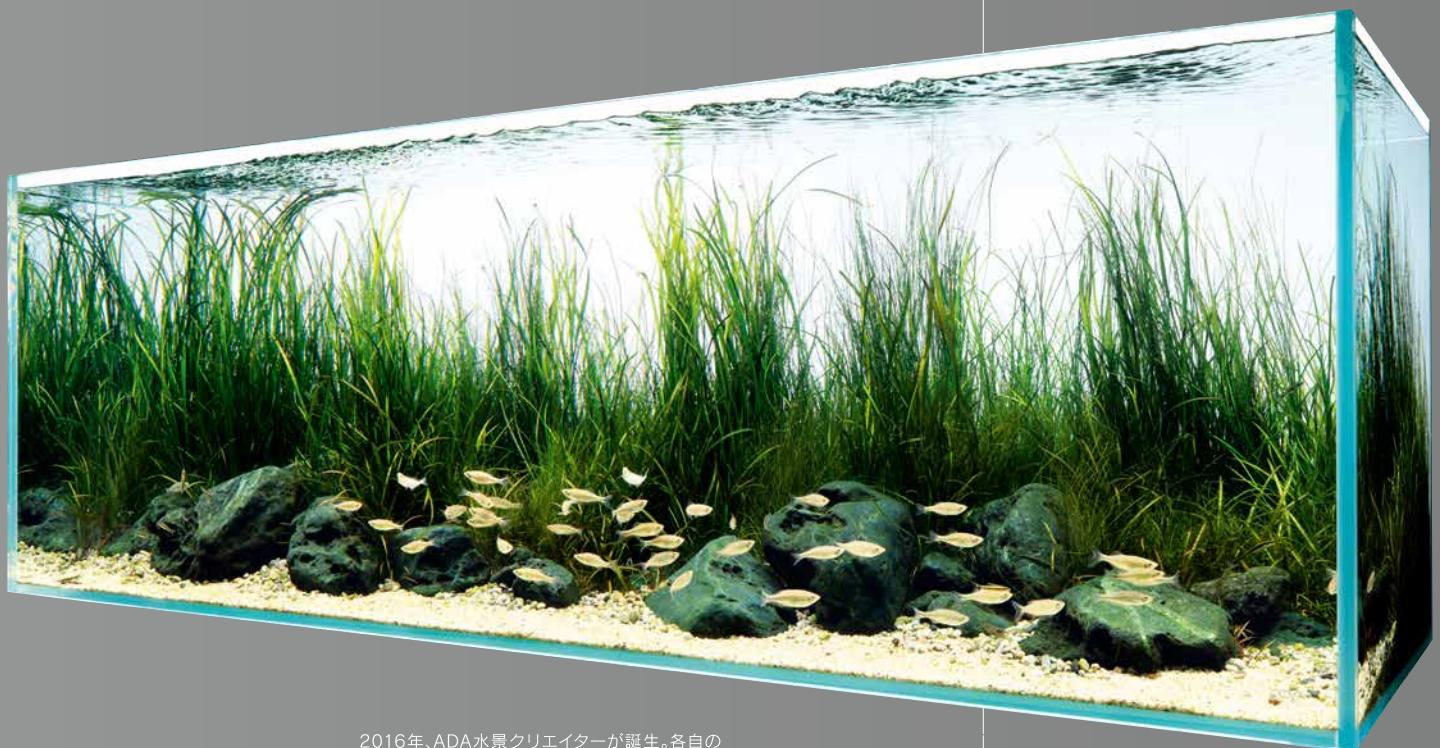
DATA — 水槽 W180×D60×H60(cm) / 撮影日 2017年10月 / 制作 本間 裕介

こうしたグラデーションブルーなどの撮影演出をヒントにライトスクリーンが開発された。



DATA — 水槽 W120×D45×H60(cm) / 撮影日 2017年10月 / 制作 荒木 大智

新たにRGB LEDを採用したソーラーRGB。最適化された分光分布によって、水の透明感は増し、水草の緑と赤をよりいっそう輝かせる。



2016年、ADA水景クリエイターが誕生。各自の感性で自然を解釈し、ネイチャーアクアリウムの魅力を伝えていくことが使命。

DATA — 水槽 W180×D60×H60(cm) / 撮影日 2018年6月 / 制作 井上 大輔

NATURE AQUARIUM CHRONICLE
2016-2018-

変わらないものの 変えていくもの

ここ数年、「アクアスカイRGB」、「メタルキャビネット」、「パワーコードS-70」などの新製品が相次いで発売され、その誕生からネイチャーアクアリウムを本気で楽しむためのブランドとして自己革新を続けてきた「ADA NATURE AQUARIUM」はさらにスマートに、そして洗練されていく。一方、新ブランドとして産声をあげたばかりの「DOOA」では、「水草ミストウォール」の登場によってネイチャーアクアリウムを原点としたスタイルの可能性を広げることに挑戦。そのシステムは、後に誕生する「ネイチャータワー360°」のベースとなる。その他にも、「システムパレダ」、

「ガラスポット SHIZUKU」をはじめとしたバルダリウム関連製品がラインナップに加わり、「DOOA」シリーズの充実が図られた。それに伴い、生体製品では「ジャングルプランツ」シリーズが誕生。今後も魅力的な種類が続々と登場していく予定だ。この30年間でADA製品やその水草育成システムは時代とともに変化してきた。しかし変わらぬものもある。それは、ネイチャーアクアリウムを通じて植物の魅力や楽しみ方を伝えていきたいという気持ち、そして自然を慈しみ「自然から学ぶ」という姿勢である。これからも、ADAは理想に向かって歩み続ける。



STAFF CREDIT
Publisher 天野 ひのぶ Art Direction NATURE AD DESIGN
Design 丸山 恵司 / 市川 亮 / 高遠 将史 / 板橋 広夢
Editor 杉本 後輔 / 岩堀 康太 / 柴田 康文 / 小川 龍司 / 亀山 喬史郎
総監修・大岩 剛 / 写真監修・阿部 正敏
Published by 株式会社 アクアデザインアマノ
Printed by 株式会社 山田写真製版所
AQUA DESIGN AMANO CO., LTD.
©2022 Printed in JAPAN

NEXT AQUA JOURNAL
MARCH.2022 vol.317
2022年2月10日(木)発売予定

アクアジャーナルの情報は一部、
ADAホームページで公開しています。
<https://www.adana.co.jp>

ADAとネイチャーアクアリウムの30年

すでに広告などでもお知らせしていますが、ADAは今年2022年で30周年を迎えます。アクアリウムショップとしての「アクアデザインアマノ」の開業はそれよりもずっと古く、創業者である前社長天野 尚が水草レイアウトを取り組み始めたのは1970年台の終わりから1980年台の初めのころです。30周年というのは、1992年に「株式会社アクアデザインアマノ」となってからということになります。30年前の1992年という年は、ADAはもちろん、ネイチャーアクアリウムにとって重要な年と言えます。天野 尚が水景制作、写真撮影を

行なった最初の水草レイアウト作品集『ガラスの中の大自然』が出版されたのもこの年なのです。この作品集の副題は「NATURE AQUARIUM WORLD」。そう、「ネイチャーアクアリウム」という名称が初めて使用された出版物でもあるのです。それ以前にも伝説のポスター「The Balance Of Nature」があったように、天野の中では自身のつくる水草レイアウトに対して当初から「自然・ネイチャー」がキーワードになっていたのは間違いありませんが、ここから自身の作品を正式に「ネイチャーアクアリウム」と呼称するようになります。

それがADA製品最初のブランド名である「NATURE AQUARIUM GOODS」へとつながることになります。ADAの30年の歴史は、ネイチャーアクアリウムとともに歩んできた歴史でもあります。本誌AJの登場はその2年後の1994年のことであり、天野の水景作品とともにネイチャーアクアリウムの正しいノウハウを伝える「ネイチャーアクアリウム情報誌」として創刊されました。今回、ADA30周年を迎えるにあたり、AJ編集部では水景作品の変遷を通してネイチャーアクアリウムの30年を振り返る企画を考えました。実際の編集に

携わったスタッフは、ほぼ全員が入社10年未満の若手であり、社歴30年近い古参のスタッフとは違った視点でネイチャーアクアリウムの歴史を振り返ってくれたことと思います。この原稿を書いている12月15日は、ADA本社竣工記念日でもあります。そしてまさに今現在、ADA本社のネイチャーアクアリウム・ギャラリーでは、天野からバトンを引き継いだ若き水景クリエイターたちが新しい水景を制作しています。30周年を迎える記念すべき2022年、ネイチャーアクアリウムがどんな展開を見せのか、AJ読者の皆様、ご期待ください。

AQUA DESIGN amano
30th
ANNIVERSARY
AQUA DESIGN AMANO
1991-2021

ネイチャーアクアリウムとともに未来へ
2021.12.15 NATURE AQUARIUM GALLERY

